

3 人造石を発明した土木の神様

服 部 長 七

(1840~1919/新川)



1 左官業、醸造業、饅頭屋をやる

服部長七翁、天保11年(1840)9月9日、愛知県碧海郡棚尾村(現 碧南市西山町)で父幸助、母けうの三男として生まれた。

長七が15歳のとき、左官をしていた父が亡くなった。豆腐屋をやったりしたが、17歳で桑名に渡り、左官の見習い修行をした。一生懸命頑張り、年々奉公の明ける前に一人前の仕事をこなせるまでになった。

18歳で故郷の新川に戻り、左官業を始めた。一心に仕事に励み、得意先も増えた。しかし20歳のとき、もっと割の良い仕事はないかと考えた。

今まで貯えたお金を持って、遠縁で居酒屋を営んでいた桑名の牧野という人を訪ねた。共同で醸造業をすることになり、昼夜もいとわず働き、年々事業は繁昌していった。ところが明治維新を迎え、事業も縮小しなくてはならなくなってしまった。

長七は醸造業から手を引き、桑名でとら屋という饅頭屋をやった。うまくいっていたが、再び故郷へ帰り、酢製造業を手がけた。

2 「東京市民に良水を」という夢、大久保利通邸の工事も手がける

酢製造業もうまくいっていたが、帰郷して1年程した明治6年(1873)33歳のとき、一儲けしようと上京した。日本橋で饅頭店を開業し、店は大変繁昌した。ある雨の降った日、井戸水(水道水)が濁り、小石川の白堀を見学し、その汚さに呆然とした。長七はきれいな水を東京市民に供給するには、濾水器を作って水を濾過することが必要だと考えた。それを「たたき」で作れないか考えた。長七は饅頭屋を閉め、たたき屋になった。ところが世間では振り向かれず、一家の生活は困窮し、吹き矢の露天商などをやり、夢の実現に向け一生懸命働いた。

明治8年(1875)、やっと仕事が舞い込み、ある家のたたき工事をした。偶然その工事の様子を見た男がたたきに興味を抱き、いろいろ長七に尋ねた。しばらくして天皇陛下の御学問所の工事を頼まれ、見事に竣工した。その後宮内省の仕事をするようになり、大久保利通や木戸孝允邸の工事もするようになった。「東京市民に良水を」という長七の夢は、大いに感心され、激励を受けた。

3 土木屋「服部組」の発展

井戸側の工事をしているとき、目塗りした所の泥が堅くなっており、ある配合で作ったたたきは水中で石のように堅くなることを発見した。その後何度も改良を重ね、いわゆる「長七たたき」を発明した。長七が36歳のときだった。

明治10年(1877)第1回内国勸業博覧会が催され、会場の床や泉水池の工事を行ったりした。工夫を凝らし立派に完成させた。内務省の品川弥二郎(後に子爵)や万博責任者の田中芳男にも知られるところとなり、強力な後押しを得た。

その後、岡崎の夫婦橋工事をたたき工法で行った。信心深い長七は、工事完成間近、岩津天満宮(現 岡崎市岩津町)に参籠した。その夢枕に現れた仙人のお告げにより立派に完成させた。しかし、「長七たたき」は、水道工事より堤防や港づくり、新田開発に向いていることを悟るようになった。

4 新たな夢、新田・港づくり

明治14年(1881)、農商務省の外国人役人が「この人造石は何ですか?」と問いかけたことから、「長七たたき」は「人造石」と呼ばれるようになった。

人造石を使った工事の先駆けに高浜の新田開発を考え、多くの借財をして事業に乗り出した。借金は、莫大にふくらんだが、田中や品川の口利きで、銀行から金を借りることが出来、明治15年(1882)春、全工事は見事竣工した。

5 宇品港(広島港)築港や神野新田(豊橋)の難工事を成し遂げる

人に人造石の作り方を教えたりし、常に私利・私欲を捨て、国益の増進に努めた。長七の評判は高まり、明治17年(1884)には宇品築港の計画を委ねられた。多くの難工事に莫大な資金が使われた。しかし、余分にかかった費用は長七の自費で負担するなどして、明治22年(1890)11月に竣工し、後に軍港として栄えた。

明治26年(1893)、名古屋の実業家神野金之助に豊橋の新田開発を依頼された。一番の難工事の潮止め工事が同年9月17日に行われた。数千人の人夫が紅白両軍に別れ、太鼓を合図に工事にかかった。まさに戦国時代の合戦さながらの状態だった。50代半ば、取り仕切る長七のアイデアとリーダー性が最も輝いた時期だった。長七は無学文盲と自称し、書を残さなかった。しかし、水と風を教師に工夫と情熱で工事のリーダーシップをとり、「人を動かす術」に長けていた。

6 熱田港(名古屋港)築港、晩年に岡崎岩津天満宮に隠栖

服部組は全国数十箇所に支店を持つ程に成長し、緑綬褒章を拝受した。明治30年(1897)、人造石工法で名古屋築港を請け負い、郷土のためにと長七は赤字覚悟で工事にかかった。私利・私欲を捨てた長七の郷土愛は地元新川の人々を動かし、手弁当で工事に参加した人もたくさんいた。服部組は名古屋港築港工事などで多大な損失を被ったが、明治35年(1902)に長七の工事は終了した。広げすぎた支店、コンクリート工法の普及なども重なり、明治37年(1904)、長七は一切の事業から引退した。長七の工事竣工後、浚渫工事などに4年の歳月をかけ、明治39年(1906)、名古屋港は開港した。その後8年の間、新川で貧困生活を送った。(盛んだった頃は千坪程の屋敷を所有)

明治45年(1912)、長七は岩津天満宮の社殿造営に短い余生をかけようと、妹とその娘を連れて天満宮に隠栖した。姪のゑいを養女にし婿を迎えて精力的に動いた。

晩年であっても大財閥の安田善次郎や憲政の神様尾崎行雄とも交友があり、人生に対する気概と前向きな性格は少しも衰えなかった。しかし、大正8年(1919)、長七は最後まで律儀と気骨のある一職人を通し、79歳の波瀾万丈の人生を閉じた。

7 功績とその後の顕彰

亡くなった翌年、新川精界寺に地元有志によって碑が建てられた。また、新川神社には、大人命の一人として祀られている。高浜には「服部天満宮」があり、地域の鎮守様として今でも祀られている。長七は岩津天満宮では中興の祖として崇められ、毎年同宮にて「長七忌」が営まれている。昭和36年(1961)には岡崎市名誉市民になっている。

また、長七の人造石は世界遺産のアンコールワット遺跡の修復にも使われ、自然環境に優しく、その価値が見直されてきている。

◆もっと知りたいなら

- ・『服部長七物語』(平22市史料別巻5 浅井久夫)
- ・『服部長七伝』(昭30中根仙吉) (平8同上天満宮復刻版)
- ・『服部長七と人造石』 (平10季刊誌『みどり』加藤良平)